



静脩

1988年9月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 25, No. 2

図書館と博物館

文学部教授 朝尾直弘

図書館も博物館も情報資料の利用にかかわる点では、よく似た性格をもった機関であり、大学の研究教育に欠くことのできない存在である。

図書館は〈書物〉を扱い、博物館は〈物〉を扱う。これがもっとも単純な区別といえよう。〈書物〉と〈物〉とでは、情報の伝えかたを異にしている。前者はみずから発信するが、後者は受け手が引き出してくれるのを待っている。

欧米の大学では、図書館と博物館の分業がうまく組織されていて、協同して大学の活動をささえている。すすんだ大学では、一般の総合図書館のほかに専門の研究図書館があり、文科系でいえば、稀覯書や写本・稿本を扱う図書館は保存に重点をおき、利用もよりきびしい条件がつけられている。これなどは、文書館・資料館にきわめて近い性格といわなければならない。博物館も歴史・考古学系統の博物館と、自然史系の博物館との区別は常識的であるが、そのほか、美術館や特定分野の専門博物館もすくなくない。つまり、それぞれが分化、発達して、教育研究に貢献している。

日本では、博物館の発達は図書館に比して一歩おくれてきた。大学ではとなると、一歩どころではなく、ごく最近までは、ほとんどないといった

ほうが正確であった。古いことはさておき、明治の文明開化でどちらも欧米から輸入されながら、博物館のほうは忘れさられ消えていったものが多い。日本の近代化が、〈書物〉として体系化された知識を追うのにいそがしく、第一次資料である〈物〉から知識を組み立てるとまをあたえなかったせいであろう。

そんななかで、京都大学文学部博物館が74年の歴史をもちえたのは、建学の趣旨と先人の識見によるところが大きい。このことは「京大広報」などで何度か触れられたので、ここでくりかえさない。

その京大では、初期のうち、文学部ができるまでに収集した資料は、図書館に保管されていた。文学部ができてからも、博物館の建物が立つまで、かなりの資料が同様に図書館のお世話になった。この関係は、今回の改築にともない収蔵庫が整備されるまで、完全には途切れることなくつづいた。

日本では、この例にかぎらず、一般に図書館が博物館の役割を一部負わされるのが、近年までの傾向であった。「博物館行き」ということばが不用品の「お蔵入り」を意味していた時代には、図書館の書庫はかっこうの「お蔵」であった。しか

し、はたしてそれでよいであろうか。

博物館は〈収集〉・〈保存〉・〈展示〉の3つの機能をもつ研究教育機関である。そのバランスがとれていないと、機能が発揮されたとはいえない。もちろん、〈保存〉だけでは博物館ではありえない。

近年、考古資料については、法律によって発掘調査が義務づけられていることもあって、独自の扱いをうけるようになってきたが、わたくしの関係する古文書などは、まだほとんどの地方では図書館の特殊業務、または有志による整理にまかされている状態にある。そのせいで、よく図書館によばれて、古文書整理の講習会にでかけることがある。そこでいつもいっているのは、図書と資料の違いである。

図書は、一般に、著者や編者が一定のテーマをもって、不特定多数の公衆にたいし、自己の考察にもとづく体系化された知識や思想を伝達する目的で、複数以上の部数を公刊するのを原則としている。テーマが書名になっているのがふつうである。書名と刊記が必ずついている。初版のほかにも重版、あるいは増補・訂正版というものもあるが、基本的な性質はおなじである。

これに対して、〈物〉としての資料は、図書のように人間の頭のなかを通過し、整理して発信された二次的な情報ではなく、それ自体何事をも語らず、沈黙している。資料は、多くの場合、それを遺した人の名はわからず、偶然のかつ断片的に残存したものである。それは過去に存在した事実の痕跡であって、事実の総体ではない。したがって、非体系的である。発掘された土器の破片を思い起こすなら、理解できよう。

古文書のように文字で書かれた資料でも、ことはおなじである。手紙や日記は公表を予期したものでなく、当然表題をもたず、筆者もすぐには特定できないのが一般である。(公表を予期していないところから、文書の場合、一定期間公開を停止するという問題もでてくる)。

資料は無名性、偶然性、断片性、非体系性を特徴としている。沈黙している資料から情報を引き

出すには、まず研究が必要であり、研究しないと名前をつけることも、分類することもできない。資料の研究ののちに、はじめて名前がつけられ、分類・整理がなされる。ここが図書とは逆なところである。

断片的で非体系的な資料は、研究の結果、系統的に展示されることによって、体系的な知識を提供する。博物館にとって〈展示〉が不可欠であるのは、そのためである。〈展示〉は、一冊の〈書物〉に相当するともいえよう。博物館が一般にたいする公開性を本来的な属性としているのも、ここに由来している。

日本でも最近はおこなわれるようになったが、アメリカでは自分の大学にない図書でも、他大学や他の図書館から、居ながらにして借りだすことができる。博物館では、展示に際し館と館の間で資料の貸借はあるが、きわめて厳重な条件のもとにおいてであって、もちろん個人に貸し出すことはない。どんな資料でも、それはただ1つしかない、個性的なものであり、その意味で文化財としての性質をもっている。完全なかたちで次世代に伝える責任をはたしつつ、展示による公開をしなければならぬ。公衆に自由に手にとって見せる図書との違いが、ここにもある。

こうしてみると、図書館と博物館との明確な機能分掌にもとづく協力態勢があらためて検討課題として浮かび上がってくるのである。

以上は違いばかり述べたが、稀観書・写本・稿本の図書館のように性格の接近している部分もあり、博物館の資料も第一次的なものばかりではない。近年はレプリカ(模型)の精巧な技術が発達し、また、資料のデータ・ベース化が進むにつれ、それらを総合的に処理し、利用する体制もととのえる必要が増大している。こうした側面でのノウ・ハウは、図書館の蓄積がはるかに大きく、先輩にまなぶべき点が多い。

博物館の組織を充実させるという当面の課題を解決すると並行して、将来の両者のあるべき姿、関係を議論しておくことも大切なことと思っている。

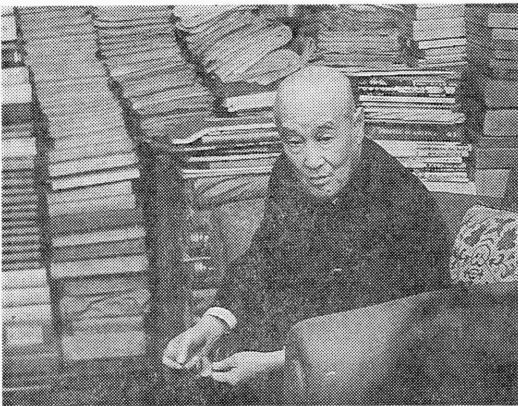
上野文庫

経済学部教授 平井俊彦

1. 本文庫の概要

上野文庫は、朝日新聞前社主・上野精一翁（1882—1970）が、生涯にわたって蒐集された文献のなかで、京都大学経済学部へ寄贈された約26,200冊からなる。その内訳は和書約4,600冊、洋書約21,600冊で、それ以外にエドモンド・バーク、トマス・カーライル、ウィリアム・ゴドウィン、J. S. ミルなど著名な思想家や政治家の自筆の書簡21点が所蔵されている。

寄贈は、昭和30年3月18日から始められ、大部分は翁の生前におこなわれたが、逝去されたあとも、翁の御遺志をついで現社主・上野淳一氏が寄贈を続けられ、今日まで33年間に及んでいる。その間、本文庫の展示は当初の昭和34年5月21—23日の3日間、旧附属図書館で経済学部創設40周年記念行事の一つとして行われた。今回、約30年を経て、ほぼ上野文庫の大要が定まった機会に、創設70周年記念行事として本年11月15日から22日までの7日間、所蔵図書のうちから代表的な新聞関係資料を展示して、上野文庫の一端を紹介してみたい。



応接間の愛蔵書に囲まれた上野精一翁

翁は、朝日新聞社の創立者の一人上野理一社主の長男として生まれ、明治36年9月に東京帝国大学法科大学に入学された。大学時代にフォックス

・ボーンの『英国新聞史』を読み、新聞研究に志されたという。明治43年に朝日新聞社に入社し、ごく一時の中断はあったものの、昭和45年4月19日に89才の高齢で逝去されるまで、新聞社の経営・運営にたずさわられるかたわら、新聞の蒐集と研究に生涯を捧げられた、文字通りの「新聞人」であった。ちなみに、自ら『英国新聞史論』を執筆、昭和5年に公表され、昭和20年に64才でジョン・ミルトンの『アレオパギチカ』の邦訳を志され、『言論と自由』のタイトルで出版され、また、ベン・ジョンソンの戯曲『新聞商会』の邦訳を出版されたのは、86才のことであった。

こうしたことから、本文庫のまず第一の特色は、新聞の現物が多数集められていることである。千葉雄次郎氏によれば、「新聞の研究には、どうしても現物を見なくてはならない。現物を見ずに新聞を論ずることはできない、というのが翁の持論であった。」という。そのなかでも、特筆すべきは、17世紀初頭以来のイギリスの新聞・雑誌の多くの種類が集められていることであろう。というのも、イギリスは「憲政の母国であるということと同じ意味で、近代的新聞の母国である」からである。ついで、第二の特色は、翁は新聞の発展を、言論の自由、公共精神の展開に即して捉えるから、翁の関心はイギリスの政治、経済、社会、文化、風俗、思想などきわめて多様な領域に拡がっており、それらに関する数多くの古典や諸著作が集められていることである。つぎに、これら二つの部門に分けて文献の内容を眺め、最後に思想家などの自筆の書簡にふれてみよう。

2. 17世紀のイギリスの新聞

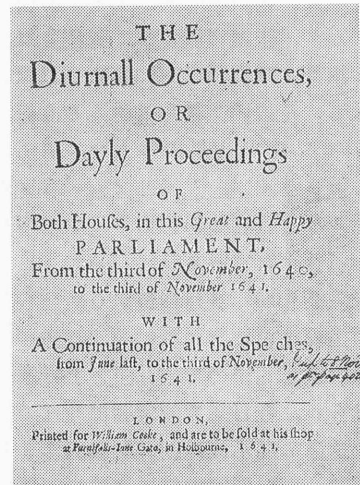
本文庫の所蔵する最も古い新聞は、イタリアの都市ジェノアに関するドイツ語の新聞『ノイエ・ツァイトウング』紙（*Neuwe Zeytung von der stat Genua*）で、1522年6月3日にラヴェンナ生まれのアントニオから神聖ローマ帝国の官僚に送

られたものである。また、バーゼルで印刷された同じくドイツ語の新聞（1576年、21ページ立て）が所蔵されている。イギリスで最も古いものとしては、チャールズ一世の「お布告書き」がある。これは、By the King. A Proclamation for the preuenting and remedying of the dearth of Graine, and other Victuals. なるタイトルで、1608年にロンドンで印刷された、穀物その他の食糧品価格の騰貴を抑制する布告である。本文庫には、国王の布告の類は、これ以外に、王政復古期の出版弾圧令など三点が、見うけられる。

『英国新聞史論』によれば、イギリスで一般人の手で定期的に新聞が刊行されるようになったのは、1622年5月23日の『ウィークリー・ニューズ』紙であるとされている。本文庫には、その前身とみられる同名の新聞のリプリント版（The Weekly Newes, No.19, Jan. 31, 1606, London, by Charlton）がある。週刊新聞となっているが、今日のように定期的に発行されるとはかぎらず、絶対王政下での検閲制度が厳しかったこともあって、主として外国の記事を取り扱っていた。だが、公安を司る星庁（スター・チェンバー）が廃止され、国内の政治記事が公刊できるようになったのは、1641年7月ごろからであった。

「機は熟していたとみえて、その年の年末から英国の新聞界は急に活発となり、パンフレットの世の中となった」（『上野精一文集』8ページ）。イギリスのピューリタン革命は、ある意味で「議会通信」紙の形をとった新聞とともに始まったといつてよい。本文庫の最も大きい特色は、1641年末に始まるこれら「議会報告」（Diurnal）の現物が、多数所蔵されていることである。たとえば、ウィリアム・クックの編集した『ジャーナル』紙（The Diurnal occurrences of every dayes proceeding in Parliament……）がそれである。それらのなかに、王党派と議会派との対立がしばしば映し出されており、1643年8月に創刊された『メルクリウス・ブリタニクス』紙（Mercurius Britanicus, communicating the affaires of Great Britaine: for the better information of the people）は、王党派の『メルクリウス・アウリク

クス』紙に対抗したものであり、『メルクリウス・ポリテイクス』紙（Mercurius politicus, comprising the sum of forein intelligence, with the affairs now on foot in the three nations of England, Scotland & Ireland）は、1年間ジョン・ミルトンも編集に加わった議会派の新聞



イギリスピューリタン革命時代の国会議事録

であるが、いずれも所蔵されている。王政復古になって、再び出版統制が厳しくなったが、そのうち『キングダムズ・インテリジェンサー』紙（The Kingdomes intelligencer of the affairs now in agitation in England, Scotland and Ireland）（1661年1月に創刊）が、見うけられる。

3. 18～19世紀の新聞と雑誌

イギリスの新聞が本格的な発展期を迎えたのは、名誉革命を経て議会政治が定着しはじめた18世紀の初期のことであった。この時期に、ジャーナリズムのなかでトーリー系とホイッグ系に分かれて政論が戦わされたのみならず、風俗や文芸、風刺や社会時評といった今日の新聞のような体裁があらわれ、17世紀の精神的風土と著しい対照をみせてきた。この代表的な雑誌として、R.スティールとJ.アジソンの編集した著名な『スペクテイター』誌（The Spectator）の、創刊号から555号までの現物が、揃っている。トーリー系の新聞としては、J.スウィフト、H.St.J.ボーリングブルックの寄稿した『エグザミナー』紙（The Examiner）、

A. ローパーの創刊した『ポスト・ボーイ』紙があるし、これに対してホイッグ系の新聞としては、J. アジソンの編集にかかる『オールド・ホイッグ』紙 (The Old Whig) や J. タッチンの創刊した『オブザバイター』紙 (The Observer) が所蔵されている。また、夕刊紙『イーブニング・ポスト』紙 (The Evening Post) が、1706年に創刊されている。

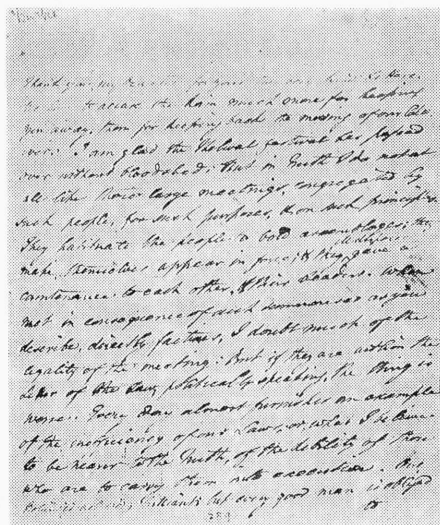
18世紀の終りから19世紀の初期にかけて、フランス革命やアメリカ独立戦争がジャーナリズムに及ぼした影響も無視しえない。たとえば、1797年1月に創刊された『アンチ・ジャコバン』紙 (The Anti-Jacobin) や、それと反対の急進改革派の新聞『コベット・ウィークリー・ポリテイカル・レジスター』紙 (Cobbett's weekly-political register) があるし、1839年9月に創刊された有名な『チャーチスト・サーキュラー』紙 (The Chartist circular) が、かなりまとまって所蔵されている。その他、わが国の新聞についても、幕末の瓦版や「官板 海外新聞」など数多く所蔵されているが、これらの説明については割愛したい。

4. 一般図書の一部・自筆の書簡

上野文庫のなかで最も出版年の古い文献は、トマス・アキナスの『神学大全』の一部で、1482年にヴェニスで出版された、いわゆる揺籃期本である。ついで『マグナ・カルタ』に関する三種の版本があり、その中の一冊は1541年の版本である。上野文庫の第二の特色は、イギリスの新聞以外に、言論・出版の自由や発展にかかわる多数の古典が、政治・社会・経済・文化・思想など各領域について所蔵されていることである。たとえば、トマス・モアの『ユートピア』(1629年版)、ジョン・フォアテスキューの『イギリス法の讚美』(1573年版)、フランシス・ベーコンの『エッセイ』(1632年版)、フーゴー・グロチウスの『戦争と平和の法』(1680年版)、また、トマス・ホブズ『リヴァイアサン』初版本の三種類があるのは珍しいし、ロックの全集については、版を異にする六種類も揃っているのは圧巻である。

18世紀に入ると古典的文献の点数も、にわかに増大する。バーナード・ド・マンデヴィルの『蜂

の寓話』、第3代シャフツベリ伯の全集第2版をはじめ、ジョナサン・スウィフトの『政治論集』、ダニエル・デフォーの『イギリス貿易の展望』のほか、ディヴィッド・ヒューム、フランシス・ハチスン、J. J. ルソー、ジェームズ・スチュアート、アダム・スミス、エドモンド・バーク、ジェレミー・ベンサム、トマス・ペイン、ウィリアム・ゴドウィンなど多くの思想家の古典や全集が揃っている。のみならず、ロバート・ウオルポール、ウィリアム・ブラックストン、Ch. J. フォックス、H. St. J. ボーリングブルック、サムエル・ジョンソンなどの政治家・文筆家の演説集・著作・伝記などが数多く所蔵されている。



エドモンド・バークの自筆書簡

なお、最後になったが、ごく最近に寄贈された資料のなかで注目すべきは、イギリスの政治家および思想家の自筆の書簡21通がある。H. St. J. ボーリングブルックが1通、ウィリアム・グラッドストーンが5通、ジョージ・グロートが4通、リチャード・ナットが1通、エドモンド・バークが4通、ウィリアム・コベットが1通、ウィリアム・ゴドウィンが3通、トマス・カーライルが1通、J. S. ミルが1通である。これらの紹介については、別の機会に譲りたい。

(注) 新聞名タイトルは、16・17世紀に使用されていた原綴である。

変りゆく目録

—オンライン検索はじまる—

1. カード目録からオンライン目録へ

本学では、明治30年の図書館創設準備時代から、多大の努力によって収集された図書のカード目録が作成されており、爾来、各学部所蔵の図書を附属図書館（中央館）で集中して検索出来る方策がとられて来た。これは総合大学のなかでは本学の一つの特色といえる。

当初から、昭和39年6月までの受入図書については簡略な記述の小型カード（12 cm×4.5 cm）を採用しており、同年7月以後は現在の標準カード（12.5 cm×7.5 cm）に移行して今日に至っている。この間に蓄積された目録カードは、和漢書・洋書を合わせ約500万枚に達しており、多くの利用者に活用されてきた。

カード目録は、長い間、各図書館で目録情報を支える手段として役立って来たが、近年、急速に発展して来たコンピュータ技術を駆使した新しい態様の目録が出現してきた。これにより、従来各大学図書館で異なっていた目録規則を統一化し、全国的に品質管理された書誌・所蔵情報を整備することができるようになった。地域的・全国的な規模での総合目録を構築することにより、学術情報資源の共有を推進することができ、研究・教育活動への支援に一層寄与しようというものである。

現在、全国の大学図書館が参加して学術情報センターが推進している学術情報システムは、目録・所在情報の形成と提供が大きな柱となっており、本学でも学術情報センターに目録登録を行うと同時に、そのデータを取り込み地域総合目録データベースへの一括登録作業を行っている。（詳細は『静脩』vol. 24, no. 3, 1988.1 参照）

2. 時代はOPACへ

コンピュータを使って利用者が直接オンライン検索出来る目録を OPAC (Online Public Access Catalog) という。これは従来のカード目録の欠点とされていたこと（例えば、目録作成とカード

編成のタイムラグ、排列の不統一による検索の漏れ、検索方法・場所の限定、カード室には多大のスペースが必要）を補い、さらに大きく発展させようとするものである。

附属図書館では、業務機械化を契機として目録システムの整備、目録データの入力、要員の養成等を行ってきた。このたび目録検索用端末機の設置、マニュアルの作成等の準備も整い、約半月の試行を経て9月1日から地域総合目録（検索対象図書約17万冊）の検索が可能となった。

《利用時間》

9時から17時まで。ただし、木、土は午前中。

《設置場所》

1階 メインカウンター前

《検索項目》

1. 書名
2. 書名キーワード
3. 著者名
4. 著者キーワード
5. 出版者
6. 分類
7. 請求記号
8. 図書受入番号
9. MARC 番号
10. ISBN

書名、著者名、出版者等の組み合わせ検索も可能です。

なお、利用方法については、掲示板の案内やマニュアルを利用し、不明な点についてはカウンターの掛員にお聞きください。

本学では、昭和60年度以降附属図書館で受け入れられた図書の入力から始め、順次、部局で整理した図書についても入力している。従って、その分についてはカード目録は新規に繰り込みされなくなった。また、本学では全学一斉に入力を開始していないため、両者を併用して検索する必要が

ある。

地域ネットワークとして、近畿北部地区（滋賀・京都・奈良）国立大学の図書も本学のホストコンピュータを通じて学術情報センターに登録されることになっており、附属図書館の端末機では、現在のところ、京都大学、滋賀大学、滋賀医科大学、京都工芸繊維大学の四大学の目録が検索出来るようになっている。

これらの情報は、本学では KUINS（京都大学統合情報通信システム）計画の進捗・具体化により、将来は図書館のみでなく、研究室の端末から自由に検索出来るようになる。

3. 今後の課題

もとよりデータベースとしては、より多くの大学・部局が、1冊でも多くの図書を入力されることが望ましい。しかし、本学では目録入力用端末機が十分行きわたっていないこともあり、入力件数は年間の受け入れ冊数に比し少数である。

8月31日現在の学術情報センターへの登録件数は、以下のとおりである。

	書 誌			所 蔵		
	和書	洋書	計	和書	洋書	計
京都大学	15,289	15,309	30,598	22,539	21,526	44,065
三大学計	8,649	6,102	14,751	11,758	7,344	19,102
合計	23,938	21,411	45,349	34,297	28,870	63,167

(注) 三大学計：滋賀大学、滋賀医科大学、京都工芸繊維大学の合計数

今後は、コンピュータシステムのレベルアップ等により、質的・量的転換の実現をはかって行く予定である。

さらに、新規に受け入れた図書の入力のみでなく、将来、京都大学90余年に蓄積された図書の目録が入力されるならば、地域的・全国的に活用され、はかり知れない効果を生み出すことであろう。

現在、主として国立七大学と学術情報センター及び国文研を中心に科研費による「大量文献情報遡及変換入力システムの高度化に関する研究」が行われている。遡及入力の必要性が急務とされている所以であり、この研究成果が期待されている。



学術情報センターの電子メールサービス始まる

すでにポスターやパンフレットで御覧になった方も多いと思いますが、国立大学共同利用機関の学術情報センターが、この4月から新しい事業のひとつとして、電子メールサービス（NACSIS-MAIL）を開始しました。

電子メールとは、パソコンなどの端末機を使って遠隔地の人々との通信を行なうもので、郵便・

電話・テレックス・ファクシミリなどと同じように遠隔通信手段のひとつといえます。郵政省も昭和56年から電子メールサービスを開始しており、最近では、ホビー用のマイコンやパソコンを使った通信のなかで BBS（Bulletin Board Service; 掲示板機能のこと）などの電子メールが随分利用されています。

学術研究の分野では、大型計算機センター間でのメールサービスが去年の10月から試験運用に入り、さらにごく最近、海外のネットワーク（BITNET）とのリンクも可能になりました。また、昭和59年東工大、慶応大、東大を結合して開始された JUNET という研究ネットワークも、東大をゲートとして海外のコンピュータネットワーク（CSNET）に接続し、すでに国際的な研究者間の広報・情報交換・討論などに活発に利用されています。このように、電子メールはデータベースとともに、コンピュータネットワークの中で大きな位置を占めつつあります。

このたび開始されたシステムは、メッセージ交換の国際標準である MHS（Message Handling System）に準拠して国際的にも将来対応できるものであり、また、研究者だけでなく、研究を支援する一般の事務職員なども利用できることが特徴といえます。通常使われている TSS 端末やデータベース検索端末、もしくはそれらの機能を持つ

ったパソコンやマイコンなどをもっている人々の間の通信を、簡単に行なうことができます。このことによって、すでに提供されているデータベースサービス（NACSIS-IR）とともに、研究者はもとより幅広い利用者が活用でき、国際的な交流も可能となります。図書館員もセンターの目録システム、その他の業務についての意見交換や打ち合わせにも利用できます。

料金は当分の間無料で、センターでは、8月末現在で735名の登録者があり、多くの人に積極的に利用してほしい、とのことです。

利用申込み、その他詳しいことは、附属図書館情報サービス課参考調査掛（内2636, 2637）または一階の参考カウンターにお問い合わせください。

なお、下図は、本システムでの電子メール送信の入力例です。この例では送信先やメール内容を入力していますが、あらかじめファイルに登録しておくこともできます。

<メールの送信例>

(※アンダーライン部分が入力です)

```

SYSTEM ? SIMAIL
***** MHS START *****                REV 1.01      88/02/19 10:15:10
MHS117 I パスワード入力
      PASSWORD
MHS001 R コマンド S[END] OR R[EAD] ? S ----- メール送信コマンド
MHS004 R 送り先 ? 空行
MHS009 R 組織名 ? 大塚大学
MHS010 R 部局名1 ? 理学部
MHS011 R 部局名2 ? 情報科学科
MHS014 R 個人名 ? 大塚△花子
MHS014 R 個人名 ? 空行
MHS010 R 部局名1 ? 空行
MHS009 R 組織名 ? 空行
MHS004 R 送り先 ? 空行
MHS005 R 主題 ? 第1回学術情報研究会の開催通知
MHS004 R メール テキスト ? 空行
* 第1回学術情報研究会のお知らせ -----
* 下記のとおり、標記研究会を開催しますので御参集下さい。
* 日時 昭和63年4月1日(金)、午後2時から5時まで
* 場所 学術情報大学学術学部第1会議室(本館2階)
* 議題 本研究会の研究課題他
* 空行
MHS007 R オプション ? DN ----- 配信要求のオプション指定
MHS007 R オプション ? 空行
MHS116 R メールを受け付けました
MHS112 R IPメッセージ識別子 : IP 020502191019 発信時刻 10:19:06

```

(学術情報センターニュース No.6 より)

トピックス

《展示会》(1)

ジャーナリズムの源流

—上野文庫の紹介—

このたび、経済学部創設70周年を記念して、同学部在所蔵している「上野文庫」（本号3～5頁に紹介）の一端を紹介するため、同文庫から代表的な資料約100余点を展示することになった。

記

日時：昭和63年11月15日(火)～22日(火)

午前9時30分～午後4時30分

会場：附属図書館展示ホール（3階）

展示資料の概要：

- ・Neue Zeitung, 1522 The Spectator, 1711—1712等、新聞のオリジナル。
- ・Milton: Areopagitica, 1738等 新聞の自由にかかわるもの。
- ・W. Godwin, E. Burke, T. Carlyle 等の自筆書簡

◎一般公開、入場無料

共催：経済学部
附属図書館

《展示会》(2)

日本の“生物学”前夜と夜明け 展

現在、教養部生物学教室には、旧制第三高等学校時代に当時の教官が中心になって集めた資料・標本が残されている。今回これらを中心に、その後追加されたものも含め、日本で近代的生物学が一般化した前後の時期を「日本の“生物学”前夜と夜明け」と題してたどって見ることにした。

日時：11月7日(月)～30日(水)

午前：9時～午後5時(土曜日は3時まで)

場所：教養部図書館展示コーナー（1F）

(教養部)

第4回日米大学図書館会議を開催

来る10月4日から6日にかけて、合衆国ウィンスコンシン州ラシーヌにおいて標記会議が開催されることになった。

我が国から、国立・公立・私立の各大学等30数名の代表団が参加する。

今回のテーマは、“Strengthening the U. S.-Japan Library Partnership in the Global Information Flow”で、主な議題は

- ①CJK (Chinese, Japanese, Korean) ファイルの発展と利用について
- ②新しい技術を中心とした図書館資料の保存について
- ③データベースの発展について
- ④ネットワークの発展について

である。

本学から西田館長が参加の予定である。

目録システム講習会を開催

学術情報システムの一つの柱である“目録・所在情報の形成”を推進するため、より多くの目録担当者の養成が迫られている。

各図書館の担当者が、学術情報センターの目録システムに精通し、目録・所在情報サービスの一層の促進を図るため、同センターと本学附属図書館の共催で下記により目録システム講習会（地域講習会）を開催した。

記

期間：8月30日～9月2日、9月6日～9日

場所：附属図書館地域共同利用室

受講者：近畿北部地区（滋賀・京都・奈良）の各国立大学から20名

なお、第1日目（8月22日）には、学術情報センターの講師から、目録システム概論及び目録情報の基準についての講義があった。

昭和62年度 蔵書統計

(昭和63年3月31日現在)

種別 部局名			純増加数			累計		
			和書冊	洋書冊	合計冊	和書冊	洋書冊	合計冊
図書	館		9,259	21,000	30,259	447,256	235,108	682,364
文学部	部		6,588	8,171	14,759	413,181	265,705	678,886
教育学部	部		2,257	1,338	3,595	52,708	41,389	94,097
法学部	部		5,092	4,415	9,507	206,640	275,952	482,592
経済学部	部		3,469	3,668	7,137	177,349	178,146	355,495
理学部	部		816	3,118	3,934	38,449	180,857	219,306
医学部	部		1,004	1,977	2,981	38,845	95,383	134,228
病院	院		15	30	45	11,638	22,317	33,955
薬学部	部		395	961	1,356	9,097	22,112	31,209
工学部	部		3,514	5,692	9,206	130,550	217,899	348,449
農学部	部		1,679	1,830	3,509	152,504	132,359	284,863
農場	場		0	0	0	1,055	111	1,166
演習林	林		222	97	319	8,550	3,193	11,743
教養部	部		6,276	7,512	13,788	261,314	219,566	480,880
化学研究所	所		160	674	834	7,736	29,068	36,804
人文科学研究所	所		5,095	1,039	6,134	366,165	51,822	417,987
結核胸部疾患研究所	所		24	185	209	1,584	3,683	5,267
原子エネルギー研究所	所		78	354	432	4,534	10,974	15,508
木材研究所	所		42	105	147	4,800	4,506	9,306
食糧科学研究所	所		48	325	373	3,805	8,805	12,610
防災研究所	所		201	693	894	8,159	17,997	26,156
基礎物理学研究所	所		60	1,141	1,201	3,990	30,251	34,241
ウイルス研究所	所		11	102	113	408	9,074	9,482
経済研究所	所		1,277	934	2,211	32,638	24,322	56,960
数理解析研究所	所		421	1,834	2,255	5,325	57,514	62,839
原子炉実験所	所		150	227	377	13,485	24,752	38,237
霊長類研究所	所		123	393	516	2,979	7,704	10,683
東南アジア研究センター	センター		550	2,638	3,188	11,814	37,773	49,587
大型計算機センター	センター		585	1,240	1,825	2,328	6,231	8,559
ヘリオトロン核融合研究センター	センター		50	129	179	837	1,898	2,735
放射線生物研究センター	センター		0	0	0	209	1,305	1,514
環境保全センター	センター		38	62	100	437	140	577
情報処理教育センター	センター		0	16	16	223	451	674
医用高分子研究センター	センター		20	15	35	128	134	262
超高層電波研究センター	センター		0	41	41	453	2,079	2,532
アフリカ地域研究センター	センター		876	1,448	2,324	1,267	1,754	3,021
本部	部		0	0	0	5,116	575	5,691
医療技術短期大学部	部		960	300	1,260	16,738	3,746	20,484
合計	計		51,355	73,704	125,059	2,444,294	2,226,655	4,670,949

本部：庶務・経理・施設・学生各部および保健診療所・保健管理センターを含む。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 25, No. 2 (通巻90号) 1988年9月30日発行・編集：静脩編集委員会 (責任者 附属図書館事務部長) 発行：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・☎ 075-753-2613